

インド・中国国境問題の現在地

——中国の意図を探るインド、協調には復帰せず

地域研究部アジア・アフリカ研究室主任研究官 伊豆山 真理

対立と協調のインド・中国関係

インドと中国は、国境問題や近隣諸国における影響力をめぐる対立を抱える一方で、緊密な経済関係を背景に、BRICS の枠組みあるいは二国間で協調してグローバルな秩序の変革を求め、米国と対峙してきた。国境地帯における両国の衝突は、2012 年から間髪的に生起していたが、軍事的エスカレーションは管理され、最終的にはトップレベルで政治的解決がはかられるというパターンが繰り返されてきた。しかし 2020 年 6 月、ガルワン渓谷におけるインド・中国間の軍事衝突は、両国軍隊に 45 年ぶりの死傷者をもたらし、国境地帯における緊張を一段高いレベルに引き上げた。その後、両国の首脳が公式会談をもつまでには 4 年の歳月がかかった。首脳会談は、2024 年 10 月ロシアのカザンで開催された BRICS サミットの機会に設定された。その前日、撤退に関する合意が成立したことが公表された。この合意は、国境における膠着状態が収束にむかうことを意味するのか。ガルワン渓谷における衝突は、インド・中国間の協調と対立のサイクルの 1 つにすぎないのか。あるいは両国関係の特徴とされる協調と対立の両義性を大きく変える転換点となるのか。

ガルワン渓谷における軍事衝突の経緯と解決に向けた動き

2020 年 6 月 15 日夜半、西部の実効支配線付近に位置するガルワン渓谷において軍事衝突が発生し、インド軍に 20 名、中国軍に 4 名の死者が生じた。この軍事衝突に先立って、国境各地点での衝突が続いていた。5 月 5 日、ラダック東部のパンゴン湖で両軍合わせて 400 人規模の衝突、5 月 10 日にはシッキムのナトゥーラ峠でインド兵 11 人が負傷する衝突が生じていることが報道されている¹。これらの事案を受けて、6 月 6 日、両国現地指揮官の会合である「高級指揮官会合 (SHMCL talks)」が開催され、インド側からは、レーに置かれた第 14 軍団司令官、中国側からは南疆軍区司令官が参加した²。会合は「前向き

かつ友好的な雰囲気」で行われ、両者は「国境地帯の状況を平和的に解決することに合意」したという声明が発表された³。しかしながら、次の衝突が 6 月 15 日夜半に発生し、インド陸軍は即時に死傷者の発生を発表した⁴。翌日記者会見に臨んだインド外務省報道官は、「暴力的な囲い込み（fence-off）」によって、両軍に死傷者が生じたことを認め、「中国側による一方的な現状変更の企図」の結果であると断じた⁵。

その後、両国による緊張緩和にむけた対話は以下の経過をたどった。高級指揮官会合のほか、外交・軍事専門家レベルによる「作業メカニズム会合」が積み重ねられ、7 月 5 日に「特使会合」として、予め特使に定められていたアジト・ドバル・インド国家安全保障顧問と王毅中国外交部長との間で電話会談が行われた。特使会合の結果、係争地点の一つで撤退の合意が成立した⁶。

しかしその他の地点に関する撤退の合意は成立せず、両軍のにらみ合いと外交当局間の非難の応酬が続いた。9 月 10 日、SCO 外務閣僚会議の機会に開催された両国外相会談において、初めて政治レベルでの合意として共同声明が発表された⁷。共同声明には国境部隊の対話・撤退・兵力引き離し、作業部会会合の継続、国境地帯における平和と安寧の維持など、広範かつ緩やかな合意が盛り込まれ、双方がエスカレーションを望んでいないことが示されている。しかし、ほぼ同時に両者が個別に発表した声明からは、明らかな相違が読み取れる。中国側が国境問題を棚上げにして両国関係の改善を図ろうとしているのに対して⁸、インド側は、まず国境地帯からの撤退がなければ関係改善もなしという姿勢を崩さなかった⁹。この相違は、今日まで継続している。

中国はなぜ国境において攻勢に出たのか—既存研究から

2024 年 12 月、ラウトレッジ社の学術誌『インディア・レビュー』は、「中国はなぜ係争地の境界を越えて侵入（intruded）したのか？」と題する特集を組んだ。編者は上海国際大学のラージ・ヴェルマで、執筆陣は米国、英国、豪州、インドの大学教員や米国、インドのシンクタンクに籍を置く研究者であるが、1 名を除きインド系である。その意味で、戦略論のディシプリンに依拠しつつも、学術論文というよりはインドに対する政策提言に近い。また、特集号のタイトルにみられるように、ガルワンにおける軍事衝突が中国側の攻勢に起因するという前提を共有している。

著者たちがインドを「現状維持」側とみなす暗黙の立脚点は共通しているが、分析には幅がある。最も相違がみられるのは、中国の行動を「弱さ」の表れとみるのか、「強さ」の表れとみるのかという点である。弱さの表れとみる議論は、コロナ対応における中国の国内的・国際的脆弱性¹⁰、あるいはインドによるジャンムー・カシミール州の自治の剥奪とラダックの直轄領化が中国に与えた脅威¹¹が、中国を軍事行

動へと追い込んだと見立てている。反対に強さの表れとみる議論では、中国のパワーの増大こそが領土に対する強硬な主張へと向かわせていると主張する¹²。中国が 50 年代からすでにサラミ・スライス戦略を採っていたとするキングス・カレッジのリシカ・チョーハンも、2020 年に中国がようやく実現させたと考える点で、中国の強さに要因を求める議論の類型であろう¹³。

論者の見方が分かれる第 2 の点は、米印間の戦略的関係深化が中国にどのような影響を与えたのかという点である。デリーのシンクタンクであるオブザーバー・リサーチ財団 (ORF) に属するハーシュ・パントとヴィヴェク・ミシュラは、米印関係の緊密化が中国の行動の最大の要因であると主張する。パントらは、2017 年のブータン領ドクラムにおける中国の越境は、米国との接近に対する不快感をインド側に伝える中国のメッセージであったと振り返る¹⁴。豪マッコリ大学のダルビル・アッラワトも、中国の越境は米印の連携に対する「懲らしめ(teach lesson)」であったとする¹⁵。一方、米印の戦略的関係における米国のコミットメントが相対的に「弱い」ことが、中国の軍事行動を促進したとみるのは、米ジョージ・メーソン大学のケティアン・ツァンである。ツァンは、国境における中国の「強制」が成立する要因を、対象国によるバランスの成否に求め、インドによるバランスの可能性は低いと主張する。ツァンによれば、インド・中国国境にかかる米国の利益は、南シナ海と比較してはるかに小さく、米国の介入可能性がないと中国は見積もった¹⁶。

このように、中国の攻勢の背後にある意図に関する評価について、既存研究の間で見解の一致はみられない。

撤退合意をどうみるか

2024 年 10 月 22 日、BRICS 首脳会議を翌日に控えたロシアのカザンにおいて、インド外務次官は、撤退に関する「合意が昨日成立した」と記者団に語った¹⁷。インド側にとってこの合意の意義は、実効支配線のいくつかの地点の警備が可能となったことであった¹⁸。合意にいたる準備として、9 月 12 日にロシアのペトルスブルグで開催された BRICS 安全保障補佐官会議のサイドラインで、国境問題特使であるインドのアジト・ドバル安全保障顧問と王毅外交部長とが会談を行っていた¹⁹。合意の成立には、ロシアの働きかけがあったとみられるが、それについては公式発言も報道も見当たらない。BRICS の開催を円滑にするためにインドと中国が矛をおさめたのであれば、2017 年のドクラム危機と類似の経過である。

それでは、ガルワン危機も収束に向かい、インド・中国間は 2020 年に始まる対立期から協調のサイクルへと入るのだろうか。筆者は、協調には戻れないと考える。その理由は、第 1 に、国境問題を棚上げして総合的関係を追求する中国と、まずは撤退に合意し履行の検証を求めるインドとの相違点が、払しょ

くされていないことである²⁰。第 2 に、インドによる米国や Quad との協力に対する中国の不快感が、今後も中国を攻勢的にさせることが予想されることである。9 月 12 日の特使会談後王毅外交部長は、インド・中国両国が「独立を遵守しなければならない」として、欧米の「影響力」を受けるインドを暗にけん制している²¹。

インド国内では、撤退合意に対する中国のコミットメントが疑念をもってみられている²²。野党であるインド国民会議派は、ジャイシャンカル外相の「我々経済小国は経済大国に戦争をしかけることはできない」という発言をとらえて、「モディ政権の小心さ」が撤退合意に表れているとして批判している²³。

トランプ政権が成立した年明け以降、米国からの「関税戦争」の圧力を受ける中国側が、インドに対して一時的に譲歩しているのであろうという見方が出現している²⁴。インド側は、現時点で中国との協力に本気で回帰するつもりはないとみられ、経済安全保障分野での日米豪との関係強化をとおして、自らの力を蓄えていく方向にあると考えられる。

¹ Ananth Krishnan, “News Analysis: Behind new incidents, a changed dynamic along India-China border,” *The Hindu*, May 20, 2020; Ameya Pratap Singh “What to Make of India and China’s Latest Border Clash,” *The Diplomat*, May 12, 2020; Jeff Smith, “Fistfighting in the Himalayas: India and China Go Another Round,” *The Diplomat*, May 15, 2020.

² Saheb Singh Chadha, *Negotiating the India-China Standoff: 2020-2024*, Carnegie India, December 2024, 5.

³ Ministry of External Affairs, India, “India-China meeting of Army Commanders on June 06, 2020,” <https://www.mea.gov.in/press-releases.htm?dtl/32746/indiachina+meeting+of+army+commanders+on+june+06+2020>

⁴ “Indian Army’s official statement on LAC face-off with China,” India TV News Desk, June 16, 2020, <https://www.indiatvnews.com/news/india/indian-army-statement-lac-stand-off-india-china-latest-news-casualties-626768>

なお、2020 年 6 月 20 日陸軍のホームページを確認した限り、中印関係に関する記述はなかった。

⁵ Ministry of External Affairs, India, “Official Spokesperson’s response to media queries on the situation in the western sector of the India-China border,” June 16, 2020, <https://www.mea.gov.in/response-to-queries.htm?dtl/32761/official+spokespersons+response+to+media+queries+on+the+situation+in+the+western+sector+of+the+india+china+border>

⁶ Chadha, “Negotiating the India-China Standoff,” 11-12.

⁷ Ministry of External Affairs, India, Joint Press Statement - Meeting of External Affairs Minister and the Foreign Minister of China, September 10, 2020, <https://www.mea.gov.in/bilateral-documents.htm?dtl/32961/joint+press+statement++meeting+of+external+affairs+minister+and+the+foreign+minister+of+china+september+10+2020>

⁸ Ministry of Foreign Affairs, the People’s Republic of China, “Wang Yi Meets with Indian Foreign Minister S. Jaishankar,” Updated: September 11, 2020, https://www.fmprc.gov.cn/eng/gjhdq_665435/2675_665437/2711_663426/2713_663430/202406/t20240607_11408112.html

⁹ Ministry of External Affairs, India, “Meeting of EAM with the Chinese Foreign Minister,” September 11, 2020, https://www.mea.gov.in/press-releases.htm?dtl/32964/Meeting_of_EAM_with_the_Chinese_Foreign_Minister

¹⁰ Avinash Godbole, “When does China go to war? Explaining China’s Covid19-driven perceived vulnerability in 2020,” *India Review*, 23:5, 2024, 436-446, DOI: 10.1080/14736489.2024.2423545

¹¹ Raj Verma, “India’s infrastructure build-up, abrogation of Article 370 and assertive stance regarding Aksai Chin: China’s motivations for intrusions in May 2020,” *India Review*, 23:5, 2024, 447-458, DOI: 10.1080/14736489.2024.2423544

¹² Mahesh Shankar, Power, threat, and Chinese assertiveness on the Sino-Indian border,” *India Review*, 23:5, 2024, 459-469, DOI:

10.1080/14736489.2024.2423551

¹³ Rishika Chauhan, “No petty frontier disputes: China’s salami slicing tactic along the LAC,” *India Review*, 23:5, 2024, 424-435, DOI: 10.1080/14736489.2024.2423546

¹⁴ Harsh V Pant & Vivek Mishra, “China’s 2020 Line of Actual Control (LAC) incursion: A function of India-US ties?” *India Review*, 23:5, 2024, 482-493, DOI: 10.1080/14736489.2024.2423552

¹⁵ Dalbir Ahlawat, “India does not accept China as the pre-eminent power in the Indo-Pacific,” *India Review*, 23:5, 2024, 470-481, DOI: 10.1080/14736489.2024.2423550

¹⁶ Ketian Zhang, “Explaining Chinese Military Coercion in Sino-Indian Border Disputes,” *Journal of Contemporary China*, 32:141, 2023, 399-416, DOI:10.1080/10670564.2022.2090081

¹⁷ “India, China begin disengagement at Depsang and Demchok,” *The Hindu*, October 28, 2024.

¹⁸ Indian Army resumes patrolling in Depsang, first since disengagement, *The Hindu*, November 5, 2024,

¹⁹ Ministry of External Affairs, India, “Meeting of National Security Adviser with his Chinese counterpart on the sidelines of the BRICS NSA Meeting,” September 12, 2024, <https://www.mea.gov.in/press-releases.htm?dtl/38287/Meeting+of+National+Security+Adviser+with+his+Chinese+counterpart+on+the+sidelines+of+the+BRICS+NSA+Meeting>

²⁰ インディアン・エクスプレスは、1月27日の北京におけるミスリ外務次官と王毅外交部長との会談に関する両国外務省のプレス・リリースを比較し、相違を読み解いている。“India-China diplomatic thaw: what the fine print of their statements reveals,” *Indian Express*, January 30, 2025.

²¹ “India, China Differ on LAC Disengagement after Doval-Wang Yi Meeting,” *India today*, September 13, 2024.

²² 研究者の見方としては、“Why trusting China on disengagement remains a challenge?” *The Borderlens*, January 15, 2025, https://www.borderlens.com/2025/01/15/why-trusting-china-on-disengagement-remains-a-challenge/?fbclid=IwY2xjawlCeWVleHRuA2FlbQlXMQABHXjbx_litS0xVYuoGmb9i4fjE8Y9Vfxdb4-RoE0E-zAa3yMK1uQxtuABTg_aem_-TH8hYZj3yRxs3rluSBF2Q。陸軍の見方としては、信頼の回復には時間が必要とした陸軍参謀長の講義を引用する下記参照。“Army chief: Need to first restore trust, assure each other on buffer zones,” *Indian Express*, Oct 23, 2024.

²³ Indian National Congress, Statement issued by shri Jairam Ramesh, MP, General secretary (Communications),AICC, Oct 23, 2024, <https://inc.in/media/press-releases/statement-issued-by-shri-jairam-ramesh-mp-general-secretary-communications-aicc-55>

²⁴ Srikanth Kondapalli, “Border Fix: A Fragile Truce Amid China’s Breach of Trust,” January 28, 2025, Impact and Policy Research Institute, <https://www.impriindia.com/insights/border-fix-a-fragile-truce-amid-chinas/> コンダバリ氏は、関税戦争に対応するために中国がインドや日本への対応を変えたと解説し、インド側は「一時休戦」と受け止めていると述べた。(2025年3月7日、デリーにおけるインタビュー)。

PROFILE

伊豆山 真理

地域研究部アジア・アフリカ研究室主任研究官

専門分野：インドの外交と安全保障

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29177）

防衛研究所 Web サイト：www.nids.mod.go.jp